THE RELATIONSHIP BETWEEN THE WHITE SPIRIT INDUSTRY MODERNIZATION AND THE CITY FORMATION IN YIBIN, CHINA

Tianran ZENG and Masaki FUJIKAWA

Keywords : City formation, Company town, Traditional industries, Wuliangye

China's Sichuan Province, Yibin City,白酒酿造業の近代化と都市形成の関係

THE RELATIONSHIP BETWEEN THE WHITE SPIRIT INDUSTRY MODERNIZATION AND THE CITY FORMATION IN YIBIN, CHINA

Tianran ZENG and Masaki FUJIKAWA

Keywords : City formation, Company town, Traditional industries, Wuliangye

1 はじめに

中国は近年、急速に発展し、都市化の進行が進んでいる。日本の「世界都市化展望 2009 年改正報告」によると、1980 年頃から日本の都市化進歩は世界で最も早く、都市化の影響が大きく示されている。1860、70 年から民主主義が芽生えはじめ、戦争などの中でも、中華民国の中後期までは苦しみながらも確実に発展していた。その後 1949 年に中華人民共和国が成立したが、建国直後の内戦などの影響で、社会、經濟が極めて不安定であり、その結果として都市構造の骨脈が消失した。その状況下で計画経済が実施されて、一定規模の産業が形成されることが多かった。しかしこの時期のエコノミーには不調が存在し、加えて文化大革命などの影響も大きく、産業の発展が緩慢であった。1980 年頃から改革開放政策が実施され、経済システムも徐々に市場経済へと変化していく。産業構造の変化を受け、都市構造も加速している。この時期でも都市産業に関して国が幾つかの重大な政策を発表・実施している。主な政策としては 90 年代からの国有企業の経営改革と都市形成政策、2000 年頃からの「三農問題」（農村村）に関する政策、5 年ごとに制定される産業部門バランス調整計画、そして近年になってよく見られる産業クラスターと特色のある産業集中や地域の発展戦略などがある。

先述したような社会状況の中で、中国では建国初期から都市構造を建設するために多くの工業都市が開発され、現在においては実力のある企業も多数存在しているが、日本の「企業都市」、または「企業城下町」の概念が存在しない。

また本稿は改革開放から既に 30 年以上経ち、中国の経済と都市化は高度成長からブレーキをかけつつある段階に入ったが、中国の都市形成や産業近代化に関する学説は殆ど提出されておらず、産業構造の変化を検討した研究も少ない。この段階で我々をテーマとした研究は大きな意義を持つと考えられる。

そして、新中国成立前から都市の規模を持ち、経済システムや政策の変化などに敏感に対応し、都市の歴史文化や周辺地域で営まれる農業なども関わりが深い中国の代表的な産業である白酒醸造業は分析事例として優れていると判断される。

本稿は前述筆者らが発表した「中国四川省藻州市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係」(1)(2)に引き続き、中国白酒醸造業の近代化と都市形成の関係を論述する。対象地である宜賓市と藻州と同様に前近代から酒造業が発達していた都市であった。
前近代からの酒造工房の在が現代までずっと使い続けられ、都市形成に大きく影響を与えていく点も共通している。昔の酒造工房が一つに統合され、建て替えられた国有会社「四川五穀酒株式会社」(以下、五穀酒)は現在の酒造会社で「国酒」の異名を持つ茅台酒を生産する茅台会社と二を争う大企業であり、海
外の知名度も高い。また都市自体は瀬戸より工業都市の性格を強く、酒造業と都市の関係をより深く理解するために適した対象と言える。

先行研究としては中国での産業と都市形成の関係について検討
したものの、酒造業の概要や都市形成の特徴を示したものは幾つ
か存在するが、本稿のように伝統産業と都市の関係を主に空間的側
面より解明しようとするものはほんの一部である。日本では企業地域下町に関
する研究などがあるが、国と業種の違いにより、本稿で取り上げ
る宜賓とは多くの相違がある。また具体的な先行研究紹介は前報で
既に行っており、本稿では省略する。

宜賓については概要として『宜賓市志』(以下、市志)が上梓さ
れているほか、五穀酒では会社の歴史や発展状況などについて
『五穀酒志』を出版している。その他、宜賓市の酒文化については宜
賓酒文化史記などの本もある。しかし、宜賓の全体の酒造業を空間
的に分析する研究と宜賓の都市についての具体的研究は非常に少ない。
都市と産業を広い視点で結びつけ分析を行う必要があると考えられ
る。

本稿では清代から現代にかけての宜賓の都市空間や社会に関する
状況を、主に各地域の地図や調査、市志や文献資料を用いて分析
する。また、酒造業については『五穀酒志』を参考にしつつ、会
社へのヒアリングで得た情報、市志や他の文献資料を元に、現地
調査での知見を加える。そして、産業と都市の結びつきのメカニズムとその変容を、主に都市空間の観点から分析した上で、前
稿の対象地である瀬戸と比較し、酒造業の近代化と都市形成の関係
の更なる知見を得ることを目的とする。

分析の時代区分としては比較しやすいように前稿と同じく中国の
経済システムの相違に基づき、市場経済改革期(1949年)、計画経
にまず分ける。そして特に市場経済時期については酒造会社の発展
段階を把握し、更に市場経済改革期(1980-1994年)、市場経済改
革期(1994-2006年)、市場経済改革期(2006年-現在)の3つの時期に分

表1 データから見る現在の
白酒業界Top3の酒造会社と所在都市の関係性強度評価表

<table>
<thead>
<tr>
<th>都市名</th>
<th>酒造会社</th>
<th>所在市</th>
<th>会社の資産総額 (百万円)</th>
<th>会社の資産収益 (都市OP) の割合 (%)</th>
<th>会社の資産収益 (都市OP) の割合 (%)</th>
<th>会社の資産収益 (都市OP) の割合 (%)</th>
<th>会社の資産収益 (都市OP) の割合 (%)</th>
<th>会社の資産収益 (都市OP) の割合 (%)</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>長江</td>
<td>長江酒造</td>
<td>長江</td>
<td>131,71</td>
<td>58.51/259.73 ≈ 4.25%</td>
<td>210.11/1,443.81 ≈ 14.55%</td>
<td>315.74/350.00 ≈ 90.21%</td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>重慶</td>
<td>重慶酒造</td>
<td>重慶</td>
<td>464.09</td>
<td>658.73</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>宜賓</td>
<td>宜賓酒造</td>
<td>宜賓</td>
<td>312.26/532.45 ≈ 8.86%</td>
<td>1,007/63,419.79 ≈ 29.38%</td>
<td>265.60/365.25 ≈ 72.72%</td>
<td></td>
<td></td>
<td></td>
</tr>
</tbody>
</table>

3 市場経済萌芽期(1949年)の酒造業の変化と都市形成

宜賓は長江の中地球上流の都市であり、古くから戦乱が続いていた。
街を造造業の立地について、清以前の地図史料はほとんど存在
せずに、酒造工房も基本的に近いなどものであるため、清時代
から分析を行う。

図2 を見ると、宜賓城の立地が分かる。三面に川、一面に山
がある半島上に都市が建設されていた。東、南面の壁は直接
川に接して建つこともなく、ある程度の距離を隔てている。他の中
国の前近代県都と同様に全体的に崩壊的な構造にしていた。
西門、北門の外には更に月城が設けられ、小南門の西側にも護城が

2 中国の白酒造業業界Top3の酒造会社と都市の関係性強度

宜賓の白酒造業の近代化と都市形成の関係について具体的な分
析を行う前に、欠点は対象地が中国の酒造業が発達している都市の
中で、どういう位置付けになっているのか簡単な分析をおこなう。
現在中国白酒造業の業界Top3の酒造会社は1. 宜賓の対象地にある五
穀酒、2.「国酒」の異名を持つ、中国政府が外国からの賓客を
接待する酒として選ばれている酒造工場を含む責任茅台会社と
3. 前稿の中で登場した老窖会社の3社とするのが一般的である(2)。この3
肺癌業界から見ればとりわけ実力のある会社であると言える
が、会社の業績規模や資本規模などを都市の経済、人口などに違い
があり、その違いによって会社と都市の各分野の繋がりを、いわゆる
「関係性」の強度に相違が生じていると考えられる。表1 で示した
通り、都市と会社の「関係性」を評価するために、会社と都市の各
種データを割合で示した指標を導入した。そしてこのデータにおい
ては、都市の各個別のデータは最小でも、茅台会社における各個別の
データが最も高い。その割合も都市では 90%や 72%などの極端な数
字になっていることがある。これらデータを参考に、現在の中
国の白酒造業業界Top3の酒造会社と都市の関係性強度を、老窖
会社と蜜州会社では「軽度」、五穀酒と宜賓市業会社では「中度」、茅
谷会社と茅谷鎮では「重度」と評価できる。

それではデータ評価で会社と都市の関係性強度で「中度」にあた
る宜賓では、この関係性強度が如何なる原因で変化し現在に至った
のか、そして如何なる形で宜賓の産業・都市間空間構造に影響を与え
ているかを、時代を通って分析してみよう。
図3 民国時期 宜賓市街地復原図（1948年） 注: ①

表2 宜賓市近代酒造工房一覧表 注: ⑤

作られた。西からの攻撃に対し守りを固めていたと考えられる。城
内については中央部に学校などの施設が設けられ、役所は東門の付
近に設置されていた。船着場は、「御府奏志書」の記述による倉庫
と塀庫の付近に2カ所設置されたともいえる。船着場の右方角に面
した城門もあるが、船着場と城門の間に一層の城壁があって二
重に囲まれているような構造であった。この構造も防御を重視し
ていたと考えられる。

市街地については城の範囲内以外は北と東の方に広がっていた。
西の方の黒瀬山の一部である真武山には現在「真武山道教建築群」
注: ⑥ と呼ばれる8つの道教があり、城портに市街地を形成していた。
道に関しては、「宜賓市街図志」の記載によると宜賓県は明洪武6年
（1373年）に石の城壁が作られ、道路も大規模な修築が行われ
た。道の基本的な形は「井」字型であり、道幅は4キロ13メートルであった注: ⑦。

図2の「主要道路」で示された通りの道はあると考えられる。

酒造工房は、「五穂流志」の記載によると、専業化した酒造工房が
明代から出現した。表2の工房1-3は明代からの工房だが、設立当
時3つの工房の報告の数は計10個ほどであったという注: ⑥。専
業化した酒造工房の出現時期は慶州と同じ頃だが、規模は比較的小
さい（前述で述べたように同時期慶州で出現した酒造工房は10口以上奥持
ったものが多い）。そして清代になると、表2で示した通りに1-9番の
計9軒の酒造工房に増えるが、目立すべきのは工房1の長發生
工房である。図2でもわかるように長發生工房は城内その内の隅に建
っていた。工房の工房主は叙州府（当時の宜賓一帯の名称）の通商（食糧運
送、水産などの事業を管理する役職を）の尹氏であった。この工房の規模
は大きく、当時中国西南地方で一番生産量が大きく、名の通った工
房であったという。また長發生工房が生産した酒は一般販売も移出
販売だけではなく、宮廷への貢物としても提供されていた。当時の
長發生工房建物は2階建てのもので、3つの入り口があり、市街
に面した部屋は9つ、その中の5つは店舗であった注: ⑧。この記述
と現在の改修された長發生工房の建物から見ると、長發生工房は宜
賓県の一番の市街地である鼓樓街に接して立地し、広い面積の店
舗を設けて、酒を製造販売したことがわかる。

民国時期の宜賓では、慶州と同じく日中戦争や内戦の影響で防衛
線が内陸部に後退したことによる商業活発化の影響を受け、市街地
が変化した。先ず城壁について、図3からわかるように1948年頃
には東と北の全部、そして南の一部の城壁が撤去され、より開放的
になっている。市街地に関しては城の北、そして西にも大規模な市
街地が展開していた。1948年頃には宜賓半島の東はほぼ全市街化
されていた様子が見られる。基本的な「井」字型の道路は中山街、
北正街、東街、小北街（1943年頃の道路）という明清期から未だ
受け継いできた道路だが、図3では中正路、林森路のような「O路」
と名称変更したものがあり、道路に関する整備が行われたことが顕
わされる。そしてこの「井」字型の道路は北と西に延び、城外の市
街地の主要道路になっていたとも考えられる。

酒造業については、表2を見ると、酒造工房が14軒に増えてい
たことがわかる。そしてその増数に規模が大きく1番の長發生工
房は依然として工房と比べて高い地位にあったと推測できる。民国期
にこの工房を経営していたのは尹氏の14代目の尹伯明で、当時宜
賓商会の常務理事、四川商務連合会の理事を務めていた。地方の商
業も動かす立場であった。長發生工房の周边には5、6番の酒
造工房の店舗が設置されていたこともある（図3のG）。注: ⑨。5、6番の
工房は北の城壁近辺にある東正街東正路付近にあった（図3、⑤）。双方
とも10口程度の客を持ち、生産規模が比較的大きな工房であった。
しかしそ東正路付近はそれほど商業圏が盛んでなかったため城内に出
店したと考えられる。城内では南正路付近にもいくつかの酒造工房と一
つの酒造店舗があった（図7、③）。民国以前に城内で酒を生産していた
のは長發生工房しかなかったが、民国期になって11番の工房が作
られた。ただし、市の数が多く増えると規模は比較的小さい。これに対し、
城外では先ず鏡江川の沿岸に幾つかの酒造工房が集中していた。比
較的に数が規模の大きい2番と4番では工房と共に店舗も開かれて
いた（図9、①、⑨）。10番などの工房が比較的少ない場所に建つ工房
は主要道路に店を経営していた。また、埠頭と茶館、食堂に近かった
からか、9、12、13、14番などは「五穂流志」によると特に店舗を
開いていなかったとみられる（図9、③、④）。南側にある金沙江
の川沿いには3番と7番の酒造工房があった（図9、①）。両方とも工
房と店舗は同じ場所に開設されていたが、7番は城内にも出店して
いた（図7）。

全体として見ると、古い工房は基本的には工房と店舗が一体であ
った（前店後場）形式。その後工房と店舗が分離する販売方式の工房が出現し、更に店舗を持たない工房が出現した。そして川沿いでの飲酒を生産する酒造工房が増加した。原因としては、宜賓の街内での井戸水が豊富、水の生産がむしろ安価でなかったからと言われている。酒造りには川の水を用いていた。岷江の水は金沙江と比べて、増水期に水がある期間が短く、酒造りにより借りているため、多くの酒造工房は岷江の川沿いに立地した。明から清までの長い間、街内での飲酒は生産していたのが長生工房のみであった。『五糧液志』によるこの工房も川の水を使って酒を生産していたが、前述した経営主の背景から考えるとこの工房は特別に街内地における生産を認められた可能性がある。一方、金砂江側の工房数が少ないのは、走馬街の商業が盛んになった時期が早く、会館などが多数存在したことから、民国以降に新しい工房を作るのが困難であったのも原因と考えられる。店舗を持たない工房の出現は水運の発展や会館、茶館などの増加により抽出と会館などに酒を供給するだけで営業が成り立つようになったのが理由だと考えられる。

全国的に見て、当時の宜賓酒造業はある程度名が通っていたが、都市に大きな影響を与える程度の規模には至らなかったと考えられる。表を参照すると当時から現在に至るまでに残された営業合計113号である。勿論その後の生産状況や保存状態にも影響され、実際には民国時期の営業はこの数字より多いであろう。しかし当時の生産量全国一である譜の合計1617口と比べると、産業規模の違いがわかる。経営方式も譜では基本的に「前店後場」形式で扱っていたのに対し、数の略しか持たない小さな工房が大半であり、大規模生産のための整備も必要なかったと考えられる。

4. 計画経済時期（1949-1980年）の酒造業の変化と都市形成
1949年に中華人民共和国が建国され、計画経済が実施された。宜賓でも譜と同様に建国前には個人経営であった酒造工房が国右化され、現在の五糧液会社へと成長していく。

宜賓の場合、都市が傾に位置していてもであり、建国前には社会の混乱に乗じた酒造の火災が長いため影響。そこで飲酒の供給も不安定で、酒造業は致命的な打撃を受けた。1948年から半数の酒造工房の生産停止が続出し、1948年の時点で宜賓薬内での酒造工房の数は147口から77口に減って、営業の数も140口余りから60-70口になった。そして1949年前後になるとほぼ全ての酒造工房が生産停止したと『五糧液志』は記載している。

建国後の1950年12月29日には「宜賓市大曲酒醸造工場連合会社」（今公園街醸造工場）が設立され、そして1952年5月に「国営第二十四酒造工場」が成立して、同年11月2日酒造が当時宜賓市街内で一番大きかった「長生工房」工房以外の酒造工房を買収し、「長生工房」工房においてもレンタル形式で使用権を得た。こうして国右会社としての五糧液が誕生した。譜市の酒造業の国右化と比べると、国右化にかかった期間が短い、経過も単純であったことが分かる。図4を見ると、成立当初の五糧液会社は従業員26名、酒年間生産量100トンほどしか小さな会社であった。そこで工房整備、規模拡大が行われるが、1980年以前の従業員数や生産量などの伸びはとても緩やかであった。

工房などの施設については、図5を見ると宜賓市街南ではA北正街付近とB小北街の東側、C北元城壁付近とD走馬街の四ヶ所に工場施設が分布していた。図4の生産量などから見て、基本的に昔の工房の施設を利用した生産であり、ほぼ拡張しなかったと考えられる。走馬街の工場（図2の3と7番である元盛福、赵元興工房）については、『五糧液志』の年表によると、1966年に金沙江が特大規模の洪水となり、走馬街の工場と南岸生産工場の一部が浸水し、大きな被害を受けたという。そして1967年には走馬街の工場の寄泥をもとに全南岸生産工場に移しと記載している。『五糧液志』と他の史料では走馬街の工場に関するその後の情報はないが、現在その場所は1997年に成立した「四川景盛グループ徳盛福九糧酸酒株式会社」の工場になっていて、酒を生産している。ただし、「宜賓情報」2013年の報道では「徳盛福工房の元にあった場所で再
び酒を生産することは昔の醸造方法を伝承及び宜賀の酒文化の発展に大きな意味を持つ（以下略）[1][2] と書かれ、1967 年から 2013 年の間、この工場は長い期間にわたり放置された可能性が高い。『五穀液志』の記載でも、当時の旧市街地の工場については以下のように記述されている。他者の前近代に酒造工場があった場所には特に工場が建てられていなかったとされる。表 2 に示され、これを見ると、民国中後期から出現した規模の小さい工場の施設はほとんど継続されていなかったことがわかる。原因としては元々の小規模の製造程度など生産方法による従業員（『五穀液志』の記述によると建築前に基本的に小規模の工場の方から生産停止していくのが一般的であった）などが影響を受けたと考えられる。

旧市街地以外では金砂江の対岸にも工場区(E 南岸工場区)が建設されていることが図 5 よりわかる。南岸工場区は日本が専用株式金 60 万円（約 1,100 万円）を用いて、1960 年から建設を始めたものである。計画用地は 1.8 万 m²、計画建築面積は約 1.5 万 m²であり、年間生産能力が 500 トンの建設計画であった。工場区には前工程生産施設(原料工場施設)と後工程生産施設(銅め、包装施設等)に従来製造工場施設や新製造工場施設など公共施設が建築され、都心の中心が西に移動していたことが観られる。そして旧市街地の北では、民國時期にもあった外北正街の隣に新しい道路が建築され、1973 年に開通された「岷江公園大橋」を通じて岷江を渡れるようになった。「岷江公園大橋」は現在の宜賀川市内唯一の交通要衝をなす橋だが、1976 年の時点で岷江と岷江の区域には小規模な市街地しかなく、商業施設などもほぼない状態であった。金砂江南岸では同様な小規模な市街地が広がり始めているが、地図に記載される道路はまだ整備されていなかった。またこの時期は南岸生産工場も完成しており、工場区の周辺も市街地は形成されていない状態であった。

鉄道については、宜賀は四川省と貴州省を結ぶ鉄道線の重要な接点として、1958 年という比較的早い時期に鉄道が開通された、現在の食品産業の交通要衝として使用されている[1][2]。ただし鉄道駅の位置と参考資料の元の図面には駅名が記載されていなかったなかで、宜賀市内の街路を大きく曲がり斜めに敷設していることが明らかである。南岸生産工場も完成しており、工場区の周辺も市街地は形成されていない状態であった。

5 市場経済時代（1980~現在）の酒造業の変化と都市形成

5.1 市場経済過渡期（1980~1992 年）

1978 年に改革開放政策が提出され、1980 年には邓小平が政策について発表を行い、具体的な方向性を決めた。五穀液志の記載から、市場経済時代に入りも、計画経済時代の制度が長く続き、従業員が生産的な活動を行っていた可能性が高いと考えられる。『五穀液志』の従業員制度に関する記載によると、「(従業員)の労働強制に関する規定はなく、労働条件は良好である」と記載されている。また、従業員の福利厚生についても記載されており、従業員の休日休暇、退職金、健康診断、通勤手当、団体旅行等の福利厚生が整備されていた。このように、市場経済時代に入りも、従業員の福利厚生が整備されており、従業員の生活が向上していることが伺える。

1992 年まで(五穀液)工場は計画経済時期の従業員制度を実施した。やや進行が進むが、労働条件は作成し、政府が計画を確認した上で(政府機関である)労働部門に引き渡し、労働部門が計画を実施した労働力に関する全体計画と黒化して、調整を行う。その後労働部門が労働力を募集し、事前に入力する。この制度の悪い点は労働部門が会社の実際の状況を考慮しなかったことである。例えば酒造工場は酒造る労働者を募集したい場合、職業上男性しか適していないが、全体計画では必ず女性が一緒に仕事をする方向があるため、女性も酒造る労働者として入社する。しかしご会社は職位を調整する権利もなかったため、とても不便であった」という[1][2]。従業員制度がそうであったように、市場経済過渡期では会社の資本管理制、資本制度なども徐々に市場経済に適したものに変化していくが、工場建設は図 6 のように大規模に行っていた。

先ず F 岷江北岸に 1978-1985 年に建設された工場区の建設経緯については、会社が工場拡大計画を制定し、市の地方税収を増加させるという目的だった。この工場建設は 1,008 口の窯を新設し、その結果酒の生産能力が 3,000 トンに増加した[1][2]。そして 1986-1998 年に建設された工場区については、国家計画経済委員会、商業部、そして四川省商業部が建設計画を承認し、国から建設資金を得て建設したものである。土地については宜賀地方行政公署で土地取引の許可を出した。従業員工場の面積は 17.3 万 m²であった。建設投資額が 1,812 万円（約 3.35 億円）で、工場の面積は約 7.6 万 m²であった。これにより、2,500 トンの酒の生産能力が増大した[1][2]。従業員工場の面積は実際の工場建設面積と比べて約 10 万 m²の余裕があると考えられる。

それ以来、工場には洗剤製品を含めて、E 南岸工場の設備改しや博物館、従業員生活関連施設を建設すると共に、物資運送チームを設立したという。
F と G の二つの工場区の建設は現在の五穀液の岷江北岸にある超大規模工場団地の基礎になったものであるが、前述の建設経緯から見ると、国と自治体の行政や管理システムも変化していたことがわかる。会社の建設計画を許可した機関も全く異なったし、関わる機関の数も異なっていた。

そして工場区の建設と関連してだが、図 6 を見ると、南岸工場がそうであったように、岷江北岸にあるこの二つの工場区が中心市街地との距離が長いことが分かる。1978 年の図 5 の市街地と対照してみると、都市の中心よりさらに遠い場所に位置していた。「五穀液」の土地を購入に関する記述でも、00 生産線（当時の農村の末期建設）の土地を徴用したという書き方であった。その建設は当時の政府側から見て、都市開発を行ったということは周辺農村の産業の育成はもとより建設の目的で行われたと推測できる。

この時期の市街地は、旧城区と金砂江南岸では鉄道沿って小規模に拡大し、岷江北岸では橋の建設により小規模な新市街地が形成されたが、1978 年と比べて大きな変化はみられなかった。

5.2 市場経済開創期(1992-1998 年)
1992 年に会社の従業員制度などが大きな変革を迎え、五穀液会社は、更に早いスピーディーで拡大していくことになった。『五穀液』で 1992-1998 年を会社の高速発展時期としている。この時期には基本的に会社が自ら資金を調達し、多くの建設を行った。原酒生産のための倉を新設するのももちろんのこと、老舗会社と同じく建物にも力を入れ、製品ラインの拡張で新製品・包装工場区を新設した。1 から 2 区は高級ラインの酒の瓶詰め・包装工場区で、3 区はアルコール度数の低い製品の瓶詰め・包装工場区である。4、5 区は下のラインの酒の瓶詰め・包装工場区で、毎年 10 万トン以上製品の瓶詰め・包装に対応できる。6 区は 1997 年に建設された瓶詰め・包装工場区であり、ハイエンドの製品専用の工場区であった。

包装以外では電力供給施設、原料・水処理施設、原酒の貯蔵施設及び他の生産サポート施設も整備された。この時期における『五穀液』に明記された投入資金の合計額は約 26 億円(482 億円)であった(23)。この時期の貿易価値を加味すると灌州で 2000 年から建設された「集中発展区域」の 120 億円(2.2 千億円)のプロジェクトにも劣らない規模と考えられる。しかし灌州の方は四川省出資であって、宜賓の五穀液の場合はほぼ全額会社が資金を調達した。この時期にはほぼ自力でこれほどの資金を調達できた会社の経営には目を見張るものがある。

図 7 を見ると 1997 年の時点では岷江北岸の区域では既に旧市街地の大きさに匹敵するほど大規模な工場団地ができていた。短期間でこれほどの建設ができるのは数億の資金が確保できたこと以外に前時期に大規模な土地を入手できていたことも関係していると考えられる。これらの建設により、五穀液会社の生産能力とブランド力も確実に上昇し、1995 年から 20 年連続で「中国の最もブランド価値のある商品ランキング」の食品業界での一位を占め続けている(24)。

市街地についても大規模な拡張が見られた。宜賓半島の部分では鉄道沿って市街地が形成された様子が見られる。また、旧市街地の南側では 1990 年の地図で見られた砂地が消えている。この時期には川の改造工事や埋め立ての工事などが行われていたと考えられる。

金砂江南岸の部分では、1990 年 10 月に開通した「南門橋」により宜賓半島と金砂江南岸が便利に行き来できるようになって、新市街地も開発され、岷江北岸についても鉄道沿いと五穀液工場地に向けて新しい市街地が展開している様子が見られる。

この時期には、宜賓の市街地は一気に拡大され、現在の宜賓市の

図 7 1997年宜賓市の街路状況と酒造工場の分布図(26)
図 8 2008年宜賓市の街路状況と酒造工場の分布図(28)
宜賀半島、(金山町)南岸、(鵜珍浜)北岸からなる都市構造が形成された。そして北岸においては工場以外の市街地の展開方向も工業団地の影響を受けたと考えられられる。

5.3 市場経済発展期（1998年-現在）

買収・合併した主な会社には「元「宜賀市印刷組合」など酒の包装など後工程でサポートする企業があるが、買収した後は会社自身の酒などの印刷だけに使うのではなく、更に設備などの整備に資金を投入し、印刷会社としての実力をつけて、全国から印刷オーダーを受けるようにしている。それ以外にも製菓会社や機械製造会社を買収し、印刷会社と同様の戦略を取っている[31]。

この時期の五穀液会社は関連会社の買収・合併などを行っているが、酒造に関してももちろん大量の資金を投入し、生産能力の向上や技術の開発、従業員の生活情状の改善、工業団地の観光客向けの観光整備を行っている。その結果、出来上がったのは図9で描かれている桜江の桜を有する巨大な工場地となっている。

この時期の市街地については旧市街地では宜賀半島南西にあった元砂地の部分に市街地が広がった様子が見られる。金砂江の岸でも大面積の新市街地が形成されていた。金砂江の東半分は川と山を境界とする一帯が市街地ではほぼ全部埋め尽くされた様子が見られる。また宜賀長江大橋が2002年に建設されたことも確認される。市街地は市街地の中心部を移設され、新市街地として機能を遂行していることも観察される。この時期は五穀液会社の高成長期であり、グループ化を含む株式公開により、宜賀市内の多くの会社を併合し、市の財政収入などの生命線を握るようにになったと言える。

2008年以降も五穀液会社は拡大し続けて、都市への影響力も強まる一方であった。図9を見てみると北岸にある五穀液の工場地が更に拡張され、宜賀市街地に匹敵する規模になっている。宜賀1で描かれた北岸は工場工場地の中心部分である山から市街に眺望する風景で、画面に収まる施設の全てがこの工場地のものである。そして五穀液北区計画2013-2030計画を見ると、更に北へ拡張する計画が立てられており、2013-2030年宜賀市全体計画ではその用地が明記されている。
この時期の北岸の工場地は普通の工場地と違い、一部は観光地として一般客が訪れることが特徴であり、観光施設も行われている。そして団地内には会社が運営しているバスや団地内だけを走っているタクシー（宜賀市内のタクシー）は塗装で区別されているなどもある。その他団地内には従業員のための生活施設や商業施設もあり、観光客向けの酒を販売する商業施設もある。もちろん産業面から見ても、入口に本社や酒の博物館、観光案内センターがあり、酒の販売や歴史的な施設や、施設や工場などの後工程施設、照明や照明や、水などを貯蔵する施設、電力などの施設も全部取り扱われている。現在の北岸工場地は独立可能1つのものとして成立していると言える。

市街地については、宜賀半島の西北部の川沿い部分が市街地で埋まった以外は、範囲上大きな変化は見られなかったが、酒造業に関する整備が数多く行われている。先ず図9の黒い線で囲まれた「桜江文化特区」(以下「桜江街区」)の正式名称は「桜江宜賀・五穀液文化特区」である。桜江街区は宜賀市内が出資し、市政府が建設・整備中の施をテーマとした街区である。総投資額は約50億円の925億円であり、2010年から建設が始まり、10年間をかけて完成する計画である[32]。図9でも見られるように、範囲内の一部は90年代以前に完成された市街地で、それらを隔てて区画整理し、再開発を行う。
ものである。そして特色街区の建設に伴い、公園などの整備も行っている。図9の横断で示されている北公園、南園池公園などがそうである。これらの公園も水をテーマとしていて、公園の壁などはまちの水文化に関する壁面などが設けられている。そして宜賓市の新しい空港の建設プロジェクト申請も2012年に国務院に許可され、建設決定された[20]。図9でも示したように、新空港は五糧液北岸工業団地から5km離れた所に建設されている。空港の正式名称は「宜賓五糧液空港」である。この空港の名前は中国でも特別であり、初めて企業の名前が入った市の空港である。「五糧液空港」の名前についてはネット上などでも新たな論議を引き起こし、法律の専門家からも異論が出されている[21]。空港の名前からも、空港を宣伝する意図が見られたが、建設位置も北岸に近い場所が選ばれている。おそらく、空から北岸を眺められるようになるだろう。このように北岸の区域全体が水をテーマとした都市計画の対象となっていけると考えられる。以上のことから会社と都市の関係性が非常に強いたると判断される。

空港や特色街区などを見ると、市政府が全力で企業を応援している様にも見えるが、実際両者の関係には軽薄もあると推定される。宜賓市都市計画局の事務局は、この会社の費用にヒヤリング[22]によると、市政府が北岸にある公園を整備する際に地下鉄車場などの問題で挫折が発生したという。それ以外にも宜賓市全体計画要旨において、東南区域（元空港があった区域とその周辺）は空港移設のため、都市建設が一時停止できない状況である[23]。などの記述もあったが、急速拡大していく企業の力に必要と発表されるにも関わらず、市の影響があることも見られる。

6. 宜賓市における白酒醸造業の近代化と都市形成の関係

全体として、宜賓において五糧液会社は70年代から当時貴州村にあった工場区を段階的に拡大させ、現在の北岸にある大規模工業団地が形成される一方で、旧市街地と南岸では工場の移転がほとんどなく、小規模でもそのまま使用し続けるような工場構成になっている。

冒頭の表1では企業と都市のデータを割合で示した指標を用いて、現在の酒造会社と所在都市の関係性を瀘州が軽度、宜賓が中度と評価した。この数字データから見て五糧液会社は経済、従業員数、工場区域面積の全ての面において都市に対して、瀘州の要塞会社より強い力をを持っていることがわかる。これまでの産業の近代化と都市形成の累積的結果と言える。

宜賓は中度と評価しているが、それは会社と都市の関係性が強くないという意味ではなく、表1で取り上げた茅台酒のようなデータで示せる各面では完全に1つの産業により成り立っているような都市に対して関係性が一段階下を表している。瀘州は宜賓と比べてデータ上もう一段階下の評価になったが、前稿を通じてわかった
表3 遠州、宜宣主要工場敷地と市街地整備比較一覧表

<table>
<thead>
<tr>
<th>参考文献</th>
<th>遠州</th>
<th>宜宣</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>資料</td>
<td>遠州</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>済原の最遠端酒造業業況</td>
<td>竜原山</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>1960年</td>
<td>1960年</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>主な工場敷地整備内容</td>
<td>基本的に遠州の酒造工場を工場敷地表</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>1970年</td>
<td>1970年</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>主な工場敷地整備内容</td>
<td>区域形成工場設立</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>1980年</td>
<td>1980年</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>主な工場敷地整備内容</td>
<td>1990年</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>1990年</td>
<td>1990年</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>大きな市街地整備内容</td>
<td>区域形成工場設立</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>2000年</td>
<td>2000年</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>大きな市街地整備内容</td>
<td>区域形成工場設立</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
<tr>
<td>2020年</td>
<td>2020年</td>
<td>宜宣</td>
</tr>
</tbody>
</table>

ようこそ都市の道路網、観光、景観整備、農業などの面で強い整備があり、関係者も弱い面に強く対応している。そして遠州に宜宣でそのような段階的な差の形成原因とそれによって生じた都市整備構造の違いを分析する。}

表3でも分かって、遠州の酒造業規模はむしろ遠州の方が圧倒的に大きかった。しかしそ計画時期においては経済システムなど、遠州が市街地の整備と、農業共に大きな拡大はなかった。市場経済への背負いの課題の解決を遠州の酒造業の定めとしたが、その時期の遠州の市街地の整備自由度はまだ高く、建設資金さえ政府的に行われるのである。そして適応していく遠州が都市経済で中国が普及し、多く産業は空前の大発展経験をしており、白鶴は酒造業などとしての性質もあるため、この時期産業を発展させ、さらに整備資金を酒造工場の整備に導入した。ここでは遠州が経済发展を観察し、業界の一に到達する急脚を達成したが、酒造業は市場で得られた資金を投資したとはいえ、同時期に工場整備に使った資金は酒造業に及ばなかった。またこの時期に遠州が急速に拡大した時期もあるが、遠州の新中心市街地が90年代後半に形成されたのに対して、宜宣は90年代後半である。産業別投資金額において、都市の拡大の資金の力がより強いために推奨できる。それによって都市成長の效率が非常に高かったと考えられる。遠州は都市と産業をもその一定段階的な規模があり、現在の都市整備構造を決定するものでもあるが、その時期に形成された産業と都市の関係性が著しく、宜宣は産業の資金を利用し、会社にとって効率の良い市場での工場拡大ができた。遠州は政府の出資を借りた整備施設などの都市の中で分散的に整備した。この都市の産業と都市の関係性を高める、宜宣では酒造業整備工場などを都市の中で分散的に整備し、市内で分散産業を形成することとなった。工場区を整備する道路なや他の必要なインフラは市政府が整備し、企業の副次的な施設を郊外化するような“都市全体展開構造”の形成において行われているといえる。それに対し、宜宣の空間整備は、企業が都市空間の一部に強い支配権を持つ、中心市街地へと繋がる道路の一部を企業が整備するとともに、関連施設はすべて、企業が支配権を持つその一部の都市空間の中で一番効果的に配置するものである。都市の一部に独立した都市のような空間を形成する“都市内都市型”と呼ぶことが出来ると考えられる。会社と都市の関係性が遠州と比べて強くまた可能性として形をとると考えられる。中国的現代都市の形成においては、計画経済から市場経済に至り、適応することが極めて重要であると考えられる。その時期には産業も急速に成長が可能となり、そしてその背後は、産業の成長をも大規模化する前に企業が著しく成長してきたため、その後の都市の建設などに伴う影響を与えたと考えられる。以上のべたように、企業の発展時期、企業の背後力のバランス、国の政策などの原因により、宜宣市の現在の都市構造が形成されたが、企業の発展により、強引に進む面もあり、会社と都市（地方政策）の間にはある程度緊張した状況が見られる。現在業界に2位である茅台会社の本拠地である茅台鎮については、実は宜宣よりも強い影響が見られるが、これは特に別途検討することとたい。
付記
本論文は、日本学術振興会・平成27-29年度科学研究費「在来産業の近代化と都市形成の対応に関する中日比較研究」（挑戦的創出研究、課題番号：15K14004、研究代表者：藤川昌樹）による成果の一部である。

参考文献
1) 欅田善、藤川昌樹：中国四省南部都市における自発的産業の近代化と都市形成の関係、日本建築学会会報特集論文集 89, 712, pp.121-1365, 2015. 6
2) 《五穀波名髪表》編著会：五穀波名髪、四川科学技术出版社、2011
3) 宜賓市地方志编纂委员会：宜賓市志、新华出版社、1992
4) 改変者：宜賓市文化史、中国文史出版社、2012
5) 前秦産業研究所：中国自発産業市場開発投資戦略評価分析レポート、2015
6) 株式会社佐川急便：宜賓市志、北京出版社、2015
7) 株式会社佐川急便：宜賓市志、北京出版社、2015
8) 株式会社佐川急便：宜賓市志、北京出版社、2015
9) 公安省刑事警察局：四川地方志，1988
10) 宜賓市志、宜賓市志編纂委员会、2009, 四川科学技术出版社
11) 宜賓市志：宜賓市志計画要旨 (2013-2030)

注
1) 2014年のデータ、会社産業統計数値及び業界統計数値は参考文献 6, 36, 48, 54, 34, 参考文献 34, 4, 43, 84, 84, 31, 31, による、都市 GDP は宜賓市統計局、「2014年度市計画主要経済指標概要」(2015)のデータ、 sowie 地域 GDP はGoogleマップの航空写真データ（2014年）をベースに図上計画を行い、事前に算出したものである。
2) ワンピースの各年数は参考文献 5, p.9を参考。
3) Google 地図 2015年航空写真を基に、「光明 21 2015宜賓城楼」、現地調査のデータにより作成。
4) 台湾国史講所「宜賓市城楼」(1948年) を元に作成。
5) 参考文献 29, 4, 9の記載により整理作成。
6) 「宜賓市道教建築群」、国家重要文化財。文化財の紹介文によると主
7) 参考文献 10, p.9。
8) 参考文献 2, p.76。
9) 参考文献 2, p.76。
10) 参考文献 2, p.90。

注1) 産業の中にある漢は国の原料を蒸発させた微生物が生産する場所であ
り、酒の産業とも重なったものである。
注2) 参考文献 2, p.21。
注3) 四川景盛グループ徳盛福九穀醇酒株式会社の hp
「http://www.lshengfu.1688.com/page/creditdetail.html?spm=x2615.2177701
6.0.0.TID(0)」を参照、アクセス日 2015, 5, 30。
注4) 参考文献 2, p.224を参照して作成、小数点後は四捨五入。
注5) 宜賓市档案館所蔵「1978年宜賓市街図」、参考文献 2、現地調査の
情報より作成。
注6) 「宜賓市志」、宜賓市志、1982年に日本語訳
セス日 2015. 9.30。
注7) 参考文献 2, p.19。
注8) 参考文献 2, p.104-107。
注9) 参考文献 10, p.252-253。
注10) 宜賓市史志年鉴事務局档案室所蔵「1990年宜賓市志」、参考文献
2、現地調査の情報より作成。
注11) 参考文献 2, p.204。
注12) 参考文献 2, p.222, p.107。
注13) 参考文献 2, p.255, p.107。
注14) 生産大隊とは、1958年から実施された農村公社実験を有する農
村の米穀組織である。農村公社制度の実験地「行村」であった、大隊
は直接農民の管理を行った。この時期の農民は孤立した農村や生産工
具と分かった状況であった。
注15) 参考文献 2, p.109-111。
注16) 1997年「宜賓市志計画現状図」、参考文献 2、現地調査の情報より
作成。
注17) 参考文献 2, p.109-111。
注18) 参考文献 2, p.104-107。
注19) 参考文献 10, p.252-253。
In order to understand the differences between company towns, this paper focused on the relationship between a brewing company and a city. Three kind of data, the ratio of the company’s profit in Yibin’s GDP, the company’s employees in Yibin’s total population, and the company’s lands in Yibin’s area, were used as evaluating indexes to analyze the relationship between the enterprise and the city from the economy, population and urban space aspects.

Specialized brewing studios showed up in the Ming Dynasty in Yibin. After the establishment of the People’s Chinese Republic of China, these studios were combined to one national company, and a rapid industrial expansion was realized after the Reform and Open Up. In the 1990s, the company went public and purchased some related companies with a large sum of capital. As a result, a production chain has been fully established.

If looking at the urban space, it will be found that the factories were mainly constructed in the countryside, along the northern riverbank before the 1980s. After 1990, as the number of the employees increased to 17,832, a city-sized factory housing complex was built. In addition, in order to create a convenient transportation system for the products, the company also paved some main roads connected to the city center.

Comparing with Luzhou, Yibin has a similar general flow of the industrial modernization. The difference is that in Yibin, the company caught the chance of the system reform in the 1990s. It purchased some related enterprises within the city, by raising a large sum of funds independently before the rapid urban expansion. This is the biggest reason for evaluating the relationship of the enterprise and the city as moderate.

As a conclusion, in Yibin, the enterprise constructed housing complexes, city infrastructures, and has formed a separated urban space within the city, therefore, it can be classified as “A City Within A City” company town. This structure has been formed due to the balance of the enterprise and the city government, the national polices and so on.